

風車

紀州の歴史と文化の風

文化財センター季刊情報誌【かざぐるま】

2016 春号

74

公益財団法人 和歌山県文化財センター

特集
登録有形文化財の保存修理

旧橋本本陣池永家住宅 土蔵、主屋を離座敷より臨む

特集 登録有形文化財の 保存修理

橋本市において、平成二十三年度より登録有形文化財の保存修理事業が四件実施されています。今回はこれらの事業についてご紹介します。

登録有形文化財とは

登録有形文化財は、平成八年に施行されたまだ新しい文化財建造物の保護制度です。従来の国宝や重要文化財と言った指定文化財制度では補いきれなかった幅広い分野の建物を後世に伝えていくために、緩やかな制度で文化財としての価値を守っていかうとするものです。東京タワーや通天閣が登録されていることからこの制度の特徴が窺われます。和歌山県下では平成二十八年一月現在で二〇一件が登録されており、平成二十五年度には県庁本館も登録されています。

火伏医院（橋本市橋本）平成二十三～四年度

火伏医院は、橋本市の中心部を貫く大和街道に面し、高野参詣の拠点にふさわしい伝統的な町屋建築である主屋（一七二二）の西側に大正時代の洋館である病院棟が並び立ち、伝統とモダンな雰囲気が融合しています。

旧市街地の土地区画整理事業により曳家



写真1 火伏医院

を行う必要が生じ、この機会にあわせて屋根の葺き替えや白蟻被害を受けた部分の補修などを行いました。病院棟は修理後も現

役で使用されるため、内装を含め、可能なかぎりオリジナルの姿を残すように留意しました。また、病院棟正面のコンクリート製塀もあわせて曳家するなど、街区を構成する景観にも配慮しました。

旧葛城館（橋本市高野口町）平成二十四年度

旧葛城館は、明治時代後期の木造三階建ての旅館建築です。平成十三年の登録時にはすでに廃業していましたが、JR和歌山線高野口駅前建つノスタルジックなその姿は、高野山参詣の正面口としての高野口の歴史を今に伝える存在でもあります。

木造で華奢な三階建てとするうえ、極めて開放的に作られており、各所で目立ってきた床の傾斜などの修正と耐震補強を実施



写真2 旧葛城館

しました。生活空間として活用する部分や補強材を設置する部分を、背面側の布団部屋や既に改変されていた部分に限定することで、ガラスの建具が印象的な正面側は、内部の座敷空間も含め従来の姿を残すことが出来ました。

旧橋本陣池永家住宅（橋本市橋本） 平成二十五～七年度

池永家住宅は、橋本市橋本の伊勢街道（国道二四号線）と紀ノ川に挟まれた一角に建ち、主屋と表門、土蔵が旧街道に面し、離座敷は紀ノ川を望むという、当地における大規模商家の屋敷構えの一典型とも言える存在です。江戸後期には紀州藩の本陣として離座敷が藩主の宿泊などにも利用されました。重厚な構えの主屋は享保十六年（一七三一）以前の建物で、建立年代が判明した和歌山県内の民家としては、最古の建物と言われています。

しかし国道の拡幅と紀ノ川の護岸整備のため、敷地全体が南に三メートルほどセツトバックすることとなり、文化財に登録されている建物すべてを曳家し、これにあわせて雨漏りで痛んだ梁などの補修や、改造された部分の復旧工事を、三ヶ年をかけて実施しました。

主屋は伝統的な平面を持つ町屋ですが、西端の座敷部分をのぞき、一時期はジーン

ズシヨップとして利用されるなど大きく改造され、正面も現代的なシャッターが納まる姿となっていました。

登録文化財においては、歴史的建物としての外観を後世に伝えることが重要視されます。今回の修理では、柱などに残る痕跡や、古絵図、古写真資料などを調査し、文化庁の確認を得た上で、並び建つ土蔵とあわせ、正面外観を復元的に修理しました。

改変が少なかった主屋の座敷部は、床組も含めてオリジナルの部材を可能な限り残し、当時の技法なども保存するように努めました。一方改変が大きかった土間や中央居室部は、近年の改造部分を撤去し、当初の部材を残しつつ壁などを新設して耐震補強を施すなど、将来の活用に備えることとしました。

この他主屋の大棟では、建立年代より時代が下る宝暦二年（一七五二）に橋本市に隣接する奈良県五条市で作られた鬼瓦が確認されました。一方、丸瓦や平瓦には同時期の大阪泉南の瓦が多量に使用されていました。建立時期との時代差や、産地の異なる瓦が併用されている理由の解明にはいたりませんが、分類調査の結果を記録すると伴に、可能な限り屋根に再用することで、資料として後世に伝えることとしました。



写真4 主屋大棟鬼瓦銘



写真3 池永家住宅 主屋正面古写真

みそや別館（橋本市橋本）平成二十七年

みそ屋別館は、大和街道を挟んで火伏医院の向かいに建つ明治期の呉服商の屋敷です。

主屋には棟札が残り、明治十七年（一八八四）に京都と橋本の大工棟梁により建てたことが確認されています。北側背面が土手となる傾斜地に建てられており、敷地北端の上蔵及び離座敷、下蔵は、主屋の二階ほどの高さの土地に建てられ、各建物が渡り廊下で立体的につながる、遊び心に富んだ建物です。

みそや別館も火伏医院同様に、土地区画整理事業で一旦全ての建物を隣接地に仮曳家し、北側の擁壁や敷地造成工事完了後、元の位置に曳家しなおす事業を進めています。あわせて各建建の修理や、改造された部分の復原調査を進めています。



写真5 みそや別館
主屋屋根工事用足場より火伏医院を臨む



写真6 主屋曳家工事



写真8 発見された主屋正面出格子の古材

いました。しかし今回の修理に伴う調査の結果、大正時代の改造時に撤去された出格子や床机、特徴的な揚戸などの古材が多数発見され、オリジナルの部材を使って正面部分を復原することを目指して作業を進めています。

屋根には、地元東家地区で焼かれた『瓦与』の瓦が使用されていることが確認されました。かつては橋本駅の操車場周辺に三軒ほどの瓦屋があったとのことで、『瓦与』の瓦は橋本市からかつらぎ町にかけての建物の屋根にごく当たり前にのせられていたものですが、急速に姿を消しつつあります。



写真7 主屋鬼瓦銘

このような材料を大切に再利用し、地域の歴史を後世に伝えることも、登録文化財の大切な役割です。
(多井 忠嗣)



定年という歳を迎えて

(発掘調査の常識)

私が文化財研究会並びに文化財センターにお世話になったのは、昭和58年7月でした。若いころは定年まではまだまだ先が長いと思っていました。今年、定年を迎えてみて長かったようで短かったような、どちらとも言いようのない感があります。

発掘調査の仕事は、良きにつけ悪しきにつけ、よく今日までやってこれたものだと感慨深くなり、昔、自分が携わった調査を思い出す今日この頃です。

仕事での失敗談は数知れずありますが、完璧な調査というものは殆んど無いと言っても過言ではないと思います。これは私だけではないと思いますが……。例えば、検出した遺構(柱穴や溝など)を掘削するのですが、この時に掘りすぎだの、掘り足りないだのという結果が往々にして付きまっています。こんな時の救世主が、土層堆積状況の確認用ベルトです。大抵の遺構には、このベルトを残して掘削し、後にこのベルトに沿って断割りを入れ、正しい断面形状

や底の位置が確認できるといふ誠にありがたいものです。裏を返せば、このベルトなしでは十分な調査ができません。

必要不可欠なベルト様ということになります。次に「土坑」について少し触れます。この言葉の定義は、発掘調査で、過去に人間が掘りくぼめた性格のはっきりしない穴ということ、調査においては便利な言葉です。柱穴、墓穴、竪穴建物といったような性格付けのできる穴とは違い、何の変哲もない単なる穴を呼称する場合によく使われます。挙句の果てに、土坑のできそこないなどは、土坑状遺構などと「状」を付すことにより更に曖昧さが強調された表現になります。平たく言えば、「よく判りましえくん。」ということになりますよネ。



和田遺跡 奈良時代の木柱井戸断割状況

元々、遺構には意味のないものなどはないのですが、これら遺構の性格が判明すれば、その時代時代の生活様式がくっきりと細部まで解る反面、推量の域が狭まることとなり、発掘調査の魅力というか楽しさも半減するでしょうネ。

さて、発掘調査では、調査した内容の報告書作成という難関が最後に待ち受けています。先に記述した土坑などに関したことですが、原稿執筆時には、「……であろう。」「……と思われる。」「……と考えられる。」「……の推量する言葉がよく使われます。余り断定や断言することは禁物ですよネ。これをしちゃうと、時には独り歩きをして恐ろしい事態になりかねませんから!」「恐ろしい事態」、それはご想像にお任せします。かく言う私も推量言葉の使用頻度の高い一人ではあるのですがネ。

最後に、調査をしていると、調査員の殆どが体験することなのですが、頭の上で声がある。「古墳掘ってるんかえ?」「古墳の時はそれでいいのですが、古墳は遺跡の中の種類です。もう一つ、「○○○出るかあ?」「絶対とは言いませんが、「出ませんか!」

(佐伯和也)

往時 茫々

きわめて私事ながら、この春で筆者は発掘屋を卒業、定年退職を迎えます。

はじめて現場に立った時から35年余、いまでは調査に携わった遺跡の数も、作成した報告書の数も忘れるほどになってしまいました。

そうした中で、印象深く、いまだに記憶に残る遺構というものもいくつかあります。写真の「竪穴建物」もそのひとつ。平成元年に行ったかつらぎ町の佐野遺跡の調査で検出した弥生時代後期の建物跡ですが、真円に近い形状の美しさもさることながら、炉堤とよばれる炉の周囲のわずかな盛り上がりも見逃さず掘りきった満足感のある遺構です。

正直に言えば、こうした満足のいく調査と言うのは少ないですよ。むしろ掘り間違えたり、よくわからなかった事例の方が圧倒的に多いです。これまで数えきれないほどの竪穴建物やお墓などの遺構を掘ってきましたが、一番掘ったのは「墓穴」だった気がします——。調査に関しては、顧みて忸怩たる思いがありますね。

それにしてもこの35年余りで、発掘の世界も大きく様変わりしました。使う道具も

とつをとつでも、測量に使うトランシットは、最初はバーニヤ式のもので、関数電卓を片手にやっていたりましたが、途中でセオドライトに代わり、今や光波式のデジタルで、斜距離も自動計算で補正してくれます。

報告書に掲載する、遺構や遺物実測図のトレースは、昔はすべてロットリングペンをを使ってやっていた。今は大半がイラストレーターなどのソフトを使ったPC上での作成に変わってきています。

現代機器に疎い筆者は、負け惜しみで「味のない線だなあ」などとうそぶいています。が、これも時代の趨勢というものでしょうね。まさに往時茫々です。

こうした新しい環境では、新しい世代が育っています。ただ、近年、こうした埋蔵文化財専門職員の高齢化・後継者不足が問題になっています。大学の授業出席重視から現場での経験が少なくなっていることや就職難で学生が敬遠したことがその要因だと言われています。食べていけるのかという現実的な不安もあるのでしょうか。

それで思い出しましたが、かなり以前、現地説明会の終わった後、高校生の娘さんを伴ったご両親から「この子が、考古学をやりたいといっているのですが——。だいたいどうぶでしようか」との質問を受けました。「糊口をしのぐぐらいは——」と、苦笑いしながら返答したことをおぼえています。



かつらぎ町佐野遺跡の竪穴建物（1990年）

す。ご両親にすればよほど心配だったのでしよう。富貴栄華は約束できませんが、やりがいのある仕事だと思えますし、ぜひ若い世代の参加、奮闘を期待したいですね。それに付言するならば、考古男子はモテますよ。これは筆者が言っているわけではありません。世界的に著名なミステリー作家、あのアガサ・クリステイの言です。彼女曰く、「夫にするなら、考古学者が一番だ。だって、歳をとるほど興味をもつくれるから——」

（村田 弘）

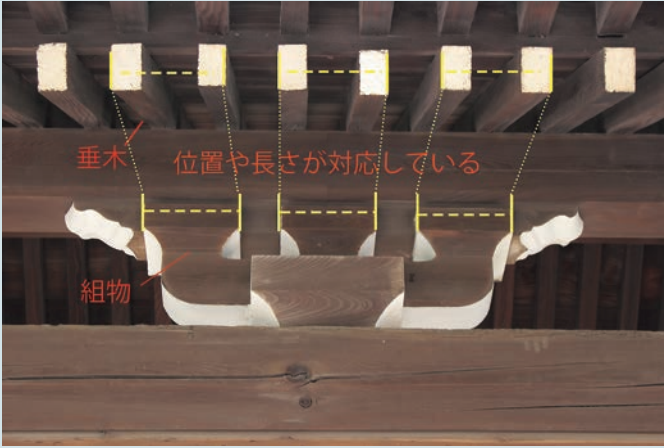
ものを測るのが難しい。私が今、日々感じていることです。文化財建造物は長い歴史を経て様々な所に狂いや風化がある場合が多いため、現状の長さを測るだけではなく、建築された頃に計画された寸法はどのようなものだったかを考えながら調査します。

初めて建物全体を実測して図面を描いた時のことです。なぜか格好が悪く、柱などの部材と軒まわりの部材とが上手に合致しませんでした。たくさんの箇所を測って長さや大きさを組み合わせれば、図面が完成すると考えていたのが間違いだったのです。原因に悩み、先輩に相談すると、建てられた当時の様子を想像して「計画寸法」というものを見つけてみなさいと助言をもらいました。

これを意識して確かめると、いろいろな規則性が見えるようになりました。例えば、それぞれの柱の間に垂木と呼ばれる屋根を支える部材が何本あるか数えて間隔も測り直すと、柱間に垂木が等間隔に並び、組物と呼ばれる接合部分とも均等に納まっていたのです。これらのルールを意識して実測した値に修正して描くと、建物全体の比率に合った正確な図面に整いました。

工夫を凝らした建築を調べるには実測も、ひと工夫が必要だと実感させられた経験でした。

(大給友樹)



垂木と組物の関係性 (総持寺総門)

きのくに歴史小話

～きのくにれきしこぼなし～

先日、北垣聰一郎先生と昼食をご一緒し、そのあと半日かけて根来山内の石垣を二人で見歩いて歩く機会を得ました。北垣さんは、我が国の城郭、なかでもその石垣研究の第一人者として知られる碩学です。金沢城をはじめ、全国のほとんどのお城の石垣修復や復元で指導的な役割をなさってこられました。

筆者は不思議と若い頃から縁が深く、根来寺の高石垣、紀の川の石積み堤防、和歌山市内の水軒堤防など、筆者が石積みの遺構に当たる度に遠路お越しいただき、その都度、有益なご教示をいただいていたきました。

石積みの技法は、大きく言えば、自然石をそのまま積み上げた「野面積み」から、法面を打ちかいた「打込みはぎ」、さらに石と石との接合面の隙間をなくす「切込みはぎ」へと変化します。ちなみに「はぎ」とは、漢字で書けば「接」、石と石の接し方の謂いです。石垣というと、何かもろく、ひ弱な印象をお持ちかもしれませんが、そんなことはないですよ。新名神高速道路の建設時、擁壁を石積みにするかコンクリートにするかで、大規模な耐力試験を実施したところ、コンクリートよりはるかに強いことが実証されました。

こうした石積み技術を有名にしたのは、穴太衆とよばれる石工集団ですね。信長の安土城建設時に重用されたのを契機に、以後、全国の城普請に徴用され、その名を馳せます。

その伝統的技術を現代に受け継ぐ名工から、北垣先生がその秘伝を聞き取ったなかに「石の心を聞く」というのがありました。つまり、その石がどこに置いてほしいか、石の気持ちを知りたい、理解してやるのが、石積みの要諦だというわけです。なるほどなあ、と思いました。

こういうのを「イシ疎通」と言います――。

(村田 弘)

催し物案内 和歌山県内の文化財関係イベント情報 (2016年春～夏)

和歌山県立紀伊風土記の丘

- 春季企画展「古墳出現期の紀伊国」 2016年 3月15日 (火) ～ 6月12日 (日)

和歌山県立博物館

- 企画展「海の国・わかやま」 2016年 3月12日 (土) ～ 4月17日 (日)
- 特別展「わたしたちのたからもの -和歌山県立博物館の名品展-」
2016年 4月23日 (土) ～ 6月 5日 (日)

和歌山市博物館

- 特別陳列「徳川吉宗と紀州の明君」 2016年 4月16日 (土) ～ 5月29日 (日)

高野山霊宝館

- 春期企画展「特集 一切経の世界」
前期 2016年 4月16日 (土) ～ 5月22日 (日)
後期 2016年 5月24日 (火) ～ 7月 3日 (日)
- 特別公開 高山辰雄筆「投華一密教に入る」 2016年 4月16日 (土) ～ 7月 3日 (日)

掲載内容は変更される可能性があります。詳細は各施設へお問い合わせください。

目次

- 1 表紙 「旧橋本陣池永家住宅 土蔵、主屋を離座敷より臨む」
- 2 特集 「登録有形文化財の保存修理」
- 5 埋蔵文化財課 短信1「定年という歳を迎えて (発掘調査の常識)」
- 6 埋蔵文化財課 短信2「往時茫々」
- 7 きのかに歴史小話「文化財建造物修理技術者の道具 ③ 伝統建築を「測る」」
「発掘屋余話③ 石積み」
- 8 催し物案内



風車74 (2016・春号)

平成 28年 3月 31日

(公財)和歌山県文化財センター

URL <http://www.wabunse.or.jp>

(公財)和歌山県文化財センター

【事務局】 〒640-8301 和歌山市岩橋1263-1
TEL 073-472-3710
FAX 073-474-2270
maizou-1@wabunse.or.jp